

吉野川源流調査について

建設省徳島工事事務所 公文 治夫
 山下 武宣
 ○大沢 敏之
 新川 和之

1. はじめに

吉野川は、古くから流域の人々の生活に多くの恵みを与える一方幾多の洪水により、大きな被害を発生させてきました。これらの被害を受けて国による吉野川の改修工事、又吉野川流域の砂防工事が開始されて以来、治水事業は100年の節目を越え、新たな節目に向かって一層の進展が図られております。

一方、吉野川の水が沿川の農業用水、水道用水として利用され、また四国開発の中核となる吉野川総合開発事業の一環として、早明浦ダムの完成により文字通り「四国の命の水」として、四国全域に豊かな恵みをもたらしています。この様に多くの住民と深く関わっている吉野川の源流をもっと広く知っていただくということで、学識経験者及び関係機関の協力を得て吉野川の水源地帯を調査し、源流について結論を得ることができましたので紹介いたします。

2. 吉野川の概要

吉野川を上・中・下流域に大別してみれば、上流域は豊富な水量を利したダム群を有し、中流域は大歩危・小歩危に代表される天下に誇る溪谷景観地帯である。さらに下流域は中央構造線の大地溝帯に平行東流して徳島平野を形成し、吉野川河口の沃野は他に比して、稀にみる雄大さである。

3. 吉野川水源検討結果

一般において、水源・源流と言った言葉による使い分けが明確でない為、本検討をとりまとめるに当たっては、最上流域を形づくる一帯を面的にとらえ水源地帯とし、流水上流端を点的にとらえ源流とした。

3-1 現地調査

吉野川では、水源地調査を過去に行ったことが無いために、

- (1) 河川工学的条件として、流量、流路延長、流域面積等を考慮し、現地踏査にて確認をする。

- (2) 社会特性としては、昔からの口碑伝説等の有無、地元住民の源流説等の調査も行った。

- (3) 現地踏査経過

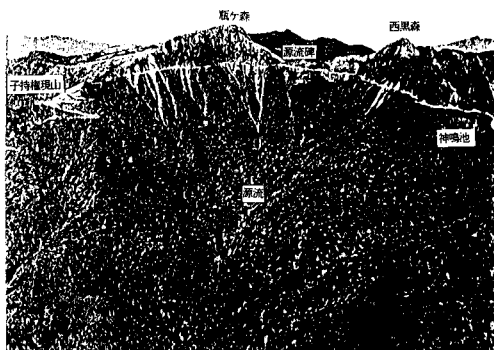
〈イ〉平成2年8月22日

事務所メンバーによる現地状況、流量等の把握を行った。

〈ロ〉平成2年10月12・13日

水源検討会メンバーによる現地調査を行った。本流と考えられる沢と地元源流説の池からの沢及び池の現地調査等を行った。

吉野川水源地帯



4. 吉野川の水源地帯

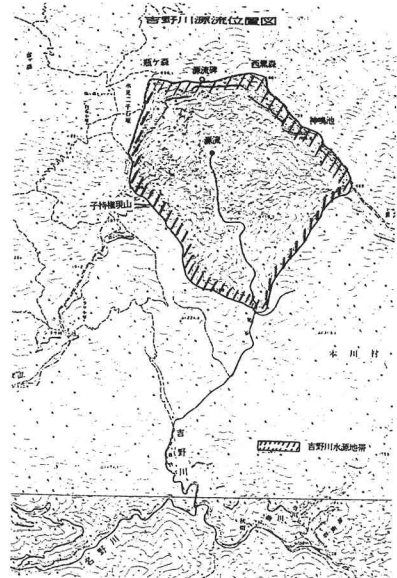
吉野川上流においては、数多くの沢が谷に流れ込んでいる。沢は、洪水時のみ川となるもの、滝を持っているもの、窪地池とよばれる器を持っているものさまざまである。

よって、これらの沢一帯を常時水のある（川らしい川）川と区分し水源地帯と考えるものである。ここで常時水のある（川らしい川）川とは、国土地理院地形図に示された河川（青色）とする。これらにより、吉野川の水源地帯は、吉野川最上流端の支川より上の、本川の流れを構成する降雨地域とする。

〈水源地帯の特性〉

水源地帯は、三波川結晶片岩地帯であって、激しい破碎帯地すべり地帯で片岩特有の網目状の谷地形が多く、全国的にも著名な地すべり地帯である。特に水源地帯内にある、神鳴池は地質時代における地すべり地帯に形成された主溝落涯の凹地であると推定される。

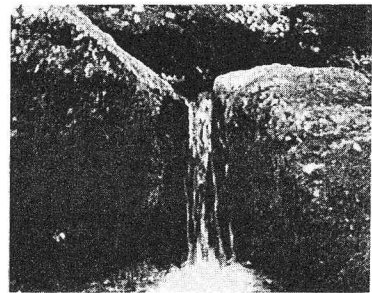
また「南路誌」「皆山集」「土佐集郡誌」などの古文書及び口碑伝説等においては、吉野川の水源と伝えられており、神鳴池は現在も水源涵養の一役を担っている。



5. 吉野川の源流

吉野川の源流は、現地調査によって流量の測定、地形的には流路延長、流域面積などを考慮しながら本流と考えられる谷川を遡り、水源地帯の中から、常時確実に流水があると考えられる地点を源流とした。

その結果、源流は瓶ヶ森からの沢と西黒森山からの沢との合流点付近とした。標高約1200m付近。



源流

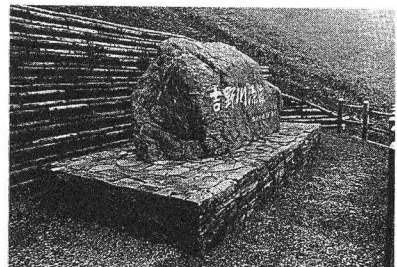
6. おわりに

平成2年8月22日、吉野川の源流調査結果に基づき、源流建立式典が行われました。

吉野川の源流は、2つの沢の合流点付近ですが、ここは傾斜のきびしい地点であり、建立位置としては不適当な為、本流と判断出来る沢を遡りつめた頂点近くに建立を行った。

源流碑は、登山道及び瓶ヶ森森林道から源流が望めることが出来るよう「南向き」にして、石碑は自然石「緑色片岩」（通称青石）を用いた。

石碑は、高さ約1.5 m、幅約3.3 m、奥行き約1.0 mで碑文字は、建設省河川局長の書により「吉野川源流」と刻字している。また、国土地理院が発行する地図上に、これを表示することとしている。



源流碑